

善峰寺

善峰寺は京都の南西部、大原野の緑豊かな山中に位置する天台宗の寺院です。このお寺は慈悲の菩薩、観音菩薩を本尊とする関西の寺院を結ぶ西国三十三所霊場の一つです。善峰寺の広大な境内は数多くの桜やあじさい、モミジが植えられ、一年を通して鮮やかに彩られます。標高が高いため、京都市街の美しい景色を眺めることができるスポットがいくつかあります。

歴史

善峰寺は、幽居にふさわしい地を求めて京都の南西部の山に立ち寄った、比叡山延暦寺の僧侶源算（983 年～1099 年）によって 1029 年に創建されました。伝説によると、彼が休息のために立ち止まった際、神（仏）が現れ、その場所に寺院を創建するようお告げがありました。岩だらけの地に寺院を建設するのは非常に困難でしたが、助けが来るという霊夢を源算が見た翌日の夜、イノシシの群れが牙で岩を砕き、土地を平らにならすということが起きました。源算は千手観音像を彫り、法華院と名付けた小さなお堂を建てて安置しました。1034 年に後一条天皇（1008 年～1036 年）は鎮護国家の祈祷を法華院にて行うことを勅令し、その際に「善峰寺」と改名されました。宮廷の庇護のもと、善峰寺は 50 以上の坊を擁する広大な寺院となりました。

善峯寺は、将軍の後継者争いが原因で京都の大部分に被害をもたらした応仁の乱（1467 年～1477 年）により多くの堂塔が焼失しました。その後、京都生まれの徳川 5 代将軍、綱吉の母である桂昌院（1627 年～1705 年）がさまざまなお堂の建設に資金を提供し、貴重な調度品を寄贈することで善峰寺の復興に貢献しました。現存する寺院の建物の多くは再建当時のものです。

境内

善峰寺の境内は 10 ヘクタール近くあります。大きな楼門をくぐると本堂の観音堂があり、そこから枝道を経て経蔵、開山堂、釈迦堂、薬師堂など山腹の建造物へとつながっています。

観音堂に安置されている寺院の本尊である 11 世紀作の千手観音菩薩像は、苦悩を抱える人々を苦しみから解き放つため、ありとあらゆる必要な道具を使って手を差し伸べる象徴です。歴史的な釈迦牟尼仏を安置する釈迦堂で祈祷すると、腰痛や神経痛などが緩和されると言われていますが、仏様のご利益としては珍しいとされています。境内の最も高い場所のひとつに建つ薬師堂には、医学の仏様である薬師如来が祀られています。桂昌院の両親はこの山の薬師如来に、娘の誕生を祈願したと言われています。善峰寺では、桂昌院が平民の娘の出から将軍の母にまで上り詰めたことから、この仏を「出世薬師」として祀っています。

他にも数多くある見どころのひとつは、「遊龍の松」と呼ばれる樹齢 600 年以上の五葉松です。この松は、石段の上にある木製の支柱に沿って水平に育つよう手入れをされています。「遊龍の松」は長さ約 37 メートルで、国の天然記念物に指定されています。

季節ごとの美しさ

善峰寺は、四季折々の美しい景観を楽しめる場所として知られ、西山連峰から刻々と変わる京都盆地を眺めることができ、ほぼ一年中、さまざまな花々が咲き誇ります。春は桜が最も人気で、白山桜あじさい苑やお堂周辺では枝垂桜、山桜、ボタン桜、ヒガン桜など約百本が咲き誇ります。一番古い枝垂桜は、17 世紀後半に善峯寺の後援者である桂昌院によって植えられたと言われています。桜の季節の前にピンク色の梅が開花し、その後は鮮やかなツツジや大きな牡丹が境内を点在します。

初夏には、庭園や境内に数千株のあじさいが咲き誇り、善峰寺の山腹を青、紫、ピンクで彩ります。その大きくて丸い花は、参拝者に幸せをもたらすとされる幸福地蔵の展望台に立って上から眺めたり、庭園内の曲がりくねった小道を散策しながら間近に観察することができます。夏の暑さが去って涼しくなり、モミジの葉が色づく、山腹一面に広がる鮮やかな紅葉を楽しむために、参拝者たちは善峰寺へ向かいます。